

乳幼児期における歌いかけの意義

— デンマークのベビー賛美歌 —

児玉 珠美

The Significance of Singing to the Child during Infancy: Denmark's Baby Hymn

Tamami KODAMA

1. はじめに

乳幼児への語りかけにおいて、マザリーズの効果と重要性は多くの研究で実証されている。マザリーズとはIDS (Infant-directed-speech) と呼ばれ、乳幼児に対して自然に出てくる語りかけ方のことである。アメリカの言語学者、チャールズ・ファーガソンが初めて用いた用語であるといわれている (Ferguson, 1966)。特徴として①普段よりやや高めのピッチ②ゆっくりとした速度③大きく付く抑揚の3点が挙げられる。いかなる言語圏、民族であっても共通してみられる普遍的な現象であることがわかっている¹⁾。乳幼児にマザリーズで語りかけることにより、乳幼児の注意をひきつけ、安心感を与え、乳幼児の脳内の言語野を刺激し、言葉獲得にも大きな影響を与えることが実証されている。

子守歌のような歌いかけの音声はマザリーズの特徴を顕著に有しており、乳幼児へ歌いかけることはマザリーズの効果をより高める効果があるといえる。さらに歌いかけることによって、乳幼児の共感能力やコミュニケーション能力育成を高めることに繋がっていくと考えられている。

今回、乳幼児への歌いかけの実践例として、デンマークの教会で実施されている活動を取り上げた。デンマークでは、自治体の保健師が中心となって、出産後の母親6人のグループが主体的な活動を展開していくマザーグループ活動が1970年から実施されている²⁾。しかしながら、グループの構成メンバーによっては継続が困難なこともあり、1回限りの活動になることもあるとのことである。そうした場合、自由な参加が可能となる「ベビー賛美歌 (Babysalmesang)」と呼ばれるプログラムがあると聞き、視察と母親³⁾と指導担当者へのインタビューを実施した。マザーグループは会話が中心となる活動だが、ベビー賛美歌プログラムはまさに歌いかけの活動である。乳幼児親子がどのようなプログラムで歌いかけをしているのか、指導担当者は乳幼児への歌いかけに対してどのような考えを持っているのか等について明らかにすることを視察の目的とした。

本論の目的は、乳幼児への歌いかけの効果をマザリーズの視点から論じ、実際の乳幼児を対象とした歌いかけの活動を実践しているデンマークのベビー賛美歌プログラムの視察及びインタビュー内容を通して、歌いかけの意義について考察をすることである。

2. マザリーズによる歌いかけの効果

(1) 歌いかけに顕れるマザリーズの効果

前述したように、マザリーズの誇張するような話し方には、新生児や乳児の注意をひきつけ、維持する効果があることがファーナルドらによって明らかになっている (Fernald, 1985)。また乳児の恐怖感を抑制し、安心感を抱かせ、ポジティブな感情を生じさせることがわかっている (Werker and McLeod, 1989 ; Striano 他, 2006)。さらに社会的相互作用を促進すること (Schachner and Hannon, 2011)、言語獲得を促進させる (Fisher and Tokura, 1996 ; Morgan他, 1987) など、多くの効果が研究で明らかにされている。

乳幼児へ歌いかける場合も、マザリーズの特徴が表出できていれば上記のような効果があると考えられる。アリソン・ストリートは、1歳未満の乳児がいる母親100人へのアンケート調査において、自分の子どもに歌いかけをどのくらいするのか、またなぜするのかという点について質問した。その結果、歌う理由として多かった回答は、「なだめるため、あやすため、笑わせるため、にっこりさせるため、声を出させるため」という内容であった。歌うことで母親自身も落ち着いた気持ちになり、母親のマザリーズの特徴を持った歌が聞こえてくることで、乳児を安心させることができるという母親が多かったという結果も出ている (Street 他, 2003)。

子守歌のメロディーやテンポが、異文化間でも一樣の特徴を持っていることも (Trehub, S.E. 他, 1993)、こうした歌の効果が普遍的なものであることを語っているといえる。また、母親の映像を乳児に提示したところ、マザリーズで語っている母親のよりも歌っている母親の映像を注視する時間が長かったことがわかっている (Trehub, S.E. and Nakata, 2001)。さらに、6か月の乳児は、母親の話しことばより、歌いかけに対して、より大きな生理反応があることがわかった (Trehub, 2003)。

つまり、マザリーズで語りかける効果は、歌いかけることによって高まっていくということがいえるのである。母親の歌の効果について、子守歌の研究者であるトレハブは、次のように述べている。

一般的に、母親の歌が乳児の覚醒に及ぼす好ましい影響は、泣き止んだり眠ったりしたりプラスの感情が生じたりする形で、乳児の心身の健康に役立つと同時に、母性行動の支えにもなる。おそらく、歌う母親が育てた健康で満ち足りた子どもは、歌わない母親の子どもよりも遺伝子を次の世代に伝える可能性が高い⁴⁾。

(2) 情動を安定させる歌いかけ

音楽が様々な感情を誘発させ、心身の健康を向上させる効果を持つことは、これまでの多くの研究でも実証されている。感情は行動に直接影響を与えるため、聴いている音楽によって個人の行動が変化すると考えられる。つまり、どのような音を聴いて育っていくかは、子どもの行動の大きな決定要因のひとつであるということがいえるのである。乳児の段階においても、母親の声は音であり、音楽である。聞こえてくる声が柔らかな心地良い音楽であるかどうかは、乳児に直接的に影響を及ぼしていく。母親の柔らかな歌いかけは、まずは乳児の情動を安定させる効果があると考えられる。一方、硬く威圧的な声や抑揚のない声は、乳児の情動を不安定

にすると考えられる⁵⁾。母親の声は乳児の情動状態に大きな作用を及ぼしているのである。原始的な感情ともいえる情動の安定は、その後の感情の発達にも影響していく。

生後6か月くらいの乳児の段階において、周囲の大人が喜びの感情表現となるメロディーの発話をするとう喜びの表情をし、悲しみや否定的なメロディー表現の発話をするとう嫌悪の反応を示すという報告がなされている。乳児たちは大人の発する言葉の意味はわからなくとも、音の抑揚といったメロディーのようなものに同調し、何かを感知しているということもわかる(Fernald, 1992)。マザリーズの特徴が顕著に表出される歌いかけは、乳児の情動の安定にとって不可欠な要素なのである。人類が乳児に子守唄を歌い続けてきた理由が、そこに存在するともいえるであろう。

前述したトレハブの「歌う母親が育てた健康で満ち足りた子どもは、歌わない母親の子どもよりも遺伝子を次の世代に伝える可能性が高い」という叙述は、母親の歌いかけが乳幼児のその後の人生にも影響を及ぼすということを語っている。つまり、母親の歌いかけは、乳幼児の情動を安定させ、その後の自己の感情の安定、さらには生命を維持するバランス能力を高めることに繋がっているということなのである。

一般的にも、心地良い音楽は相互扶助の意識を高める効果があるという実験結果も出ている(Fried and Berkowitz, 1979)。実験によれば、暗く不協和音の続く音楽と、落ち着いた音楽を聴いたあとの手伝いの依頼に対する反応が明らかに両者では異なった。つまり、心地良さをもたらす音楽や音は、聴いている者の共感性、協調性を強化することということがわかったのである。乳児は感情以前の情動の段階ではあるが、柔らかな歌いかけは、やがては共感性や協調性に繋がっていく感情を形成していくと考えられる。

3. デンマークの「ベビー賛美歌 (Babysalmesang)」

(1) デンマークにおける教会と賛美歌

デンマークにおいては、グルントヴィ (Nikolaj Frederik Grundtvig, 1783-1872) の理念が社会の基盤にあると言われている。「デンマークにとって、グルントヴィほど重要な意味を持つ人物はいない」とカイ・ダニングが述べているように、グルントヴィはデンマーク社会に多大な影響を残し、現在でもデンマークの「国父」と言われる思想家である(Thaning, 1972)。グルントヴィは生きた言葉と対話を重視し、著書以外に多くの詩と歌を残している。その多くは賛美歌として今でも教会で歌われ、初等教育機関の朝の会や集会でも歌われている。このように、伝統的に国民が歌い続けてきた歌があることが、ベビー賛美歌の背景にはある。

また、教会がコミュニティの活動拠点となっていることも、ベビー賛美歌の活動を支えている。2009年においては、デンマーク国民の81.5%以上が本国教会員である。ただし、都市部はここ数年、減少が目立っているとのことである⁴⁾。12司教区から構成され、その下に111管区と2,200教区が存在する。2,400名の牧師が在籍しており、各教区で約2500人の地域住民が割り当てられていることになる。任期4年の教会員によって選ばれた地域評議会があり、教会の実務や牧師を含む職員の雇用についての決定を行う。自分の居住する教区の牧師が気に入らなければ、他の教区に移ることが可能となっている。

しかしながら、教会への関わりは減少傾向にあり、毎週教会の礼拝に参加する教会員は5%に満たない現状である。2008年には結婚式の41%、葬儀の89%が国教会で行なわれ、新生児の

73%が教会での洗礼を受けている⁶⁾。

（２）視察対象の教会

今回、視察対象となった教会は、コペンハーゲン中心部より電車で20分くらいのところにあるバグスベアード教会（Bagsværd Kirike）である。バグスベアードは移民が多く住んでいるアパート群もあり、他の地域も同様であるが、イスラムの人たちと教会との関わりについては大きな課題となっている。

デンマークでは牧師が女性である教会も多く、バグスベアード教会の牧師も乳児の母親である。チャペルの空間には自然光が取り入れられ、壁面もクリーム色に統一されており、従来の荘厳な教会とは異なるモダンな空間である。この日は10時より1時間程度、0歳児対象のベビー賛美歌、その後2歳までの教室が開かれることになっていた。まずは、0歳児の賛美歌教室の視察を実施した。

（３）0歳児対象のベビー賛美歌

乳児親子が来る前に担当者は準備に取り掛かっていた。床に明るい色の絨毯が敷いてあり、この上に親子は座って参加することである。9時30分近くに、教会に2組の親子が到着する。待っていた担当者が笑顔で迎え、床に座る。会話が弾みだす内に、親子が次々にやってくる。この日は最終的に6組の親子が集まった。父親及び母親についての出身国情報は下記の通りである。

父親・母親共にデンマーク人である親子	4組
父親 ベトナム人・母親 デンマーク人の親子	1組
父親 デンマーク人・母親 ポーランド人の親子	1組

今回は全員が経験者であり、参加回数は4回目が3組、3回目が3組であった。開始時刻になったところで、指導者より私たちの紹介がされる。乳児への語りかけの研究目的であることも伝えられ、母親たちから「そうなのですね。」といった意味の言葉が出てくる。写真等の撮影や研究協力についても理解と承諾を得た⁷⁾。全体の流れについては、プログラム内容に沿って写真とともに説明をしていく。

①



①全員が床に車座になって集まると、指導者がトライアングルをゆっくりと鳴らし、響きを親子で楽しむ。乳児も静かになっていく。その後、立ち上がって、挨拶の歌をうたいながら、2組ずつが挨拶していく。数回歌い、全員と挨拶を完了。デンマークの学校ではよく歌われている歌である。

②



②座って、指導者がリードしながら、手遊び歌を歌う。母親は乳児をくすぐったりしながら、歌いかけている。自分の子どもに非常に集中している。ここまでの歌は賛美歌ではなく、一般的な乳児向けの歌である。ややテンポは速めであり、繰り返しの多い曲である。

③



③その後、布を使った遊びが続く。シフォン素材の布を浮遊させ、乳児に触れたりする。この時の歌は静かな賛美歌である。抑揚幅が大きく、非常に速度が遅い曲である。デンマーク語ができないポーランド人の母親もハミングで、できるだけ声を出している。

④



④乳児をひとりずつ、大きな布でくるみ、歌いながら揺らしていく。ゆっくりとした抑揚のある、やや低めの曲である。指導者といっしょに、自分の子どもだけでなく、他の乳児にも対応している。

⑤



⑤隣の母親がトイレに行く際に、預かった母親。このような関係が、2回目くらいから自然にできるとのことである。自分の子どもよりも、他者の子どものことを見守っている母親の様子であった。

⑥



⑥ピアノの上に乳児を座らせて、ピアノの伴奏が始まる。ピアノの響きを身体で感じているのか、乳児たちは静かにしている。母親たちの賛美歌の声に乳児たちは包まれている雰囲気である。非常に抑揚のあるゆったりとした賛美歌である。2曲歌い終了する。

0歳児の時間が終了すると、すぐに2歳児までの親子がやってくる。冒頭は同じプログラムだが、後半はボール遊びや、大きな布を使って全員がすっぽり隠れてしまう遊びなどになる。どの遊びも必ず歌いながら進められる。2歳児クラスが終了すると、お弁当持参の親子は地下の食堂に行き、参加親子が共に昼食をとることになっている。

5. インタビュー内容

（1）母親へのインタビュー

0歳児の母親2名がインタビューに協力してくれた。ひとりとはベトナム人と結婚したデンマーク人の母親、Aさん。もうひとりとはポーランドから移住してきた母親、Bさんである。Bさんは、まだデンマーク語の聞き取りもできず、会話は常に英語でしていた。乳児も空腹の時間帯となっていたので、質問は3点とした。

①ベビー賛美歌はどうやって知りましたか。

Aさん：洗礼を受けたので教会から案内が来た。

Bさん：デンマーク語が話せないので、家の近くの自治体がやっているデンマーク語の教室に通っています。そこで教えてもらいました。

②マザーグループには参加していますか。

Aさん：マザーグループは参加しない予定です。参加しなくても、もうたくさんのお友達もできているので、大丈夫だと思います。

Bさん：今、マザーグループの連絡が来るのを待っていますが、なかなか日程調整ができないようで、ここが助かりました。

③ベビー賛美歌の感想を聞かせてください。

Aさん：みなさんと声を出して歌って、ストレス解消になります。いろいろな話も少しずつできるようになり、困っていることも話せるようになってきています。同じころの乳児なので、共通の悩みも話し合えます。

Bさん：デンマーク語ができなくても、歌や遊びだと、いっしょに参加できるのでうれしいです。

（2）指導担当者へのインタビュー内容より

インタビュー対象者は36歳の音楽ペダゴー⁸⁾である。コペンハーゲン音楽大学で、音楽ペダゴーの資格取得。現在は音楽大学教員、コーラスと楽器指導をしながら、教会のベビー賛美歌を担当しているとのことである。

教会は無料であるが、一回10DKK（約170円）くらいの会費を徴収している教会もある。ほとんどの教会がベビー賛美歌を実施している。基本的には、洗礼を受けた乳児親子に案内状を出しているが、デンマーク語ができないと情報取得が困難になるため、英語のチラシ等も置くようにしている。マザーグループ6人でまとまって参加することもある。また、マザーグループにうまく関われなかった母親の中にも、ベビー賛美歌教室は継続することができたという母親も多いとのことである。

このベビー賛美歌の活動は、母子にとって非常に意義があると考えられる。母親の多くは、産休中であるが、同時期の乳児を持つ他の母親との交流は大きな意味がある。教会に来るというハードルはデンマークでは非常に低いものなので、母親が孤独の状態から脱し、社会的な交流も可能になる機会となる。乳幼児も他の子どもたちと接して交流できる。

プログラムの内容は、他のベビー賛美歌の担当者との情報交換や研修を通して学んでいる。特にベビー賛美歌は賛美歌のみでなく、母親が歌いやすい、乳幼児が聴きやすい歌を選んで歌っている。歌をうたうことで、母親同士、母親と子ども、そして乳幼児同志も深く繋がっていくと考えている。教会の響きは美しく、非常に心地よい音の環境である。こういった環境の中で、乳幼児親子がゆったりとした時間を過ごすことが大切である。ピアノの上に座ってピアノの演奏を聴くことは、響きが直接身体に伝わり、音を身体的に感じる機会となる。母親の歌声も、乳幼児は身体全体の感覚で感じている。私たち指導者も、そのことを意識したプログラムを作成している⁹⁾。

6. 考察とまとめ

(1) 視察及びインタビュー内容を通して

今回の視察及びインタビューを通して、デンマークの教会が実施しているベビー賛美歌は、単に賛美歌を歌うという場ではなく、指導担当者の話にもあったように、母親たちの精神的な安定を創る場となっていることがわかる。指導担当者が資格を有している「音楽ペダゴー」は、0歳から9歳までの音楽教育について学ぶコースである。ペダゴーは、音楽療法の理論も学んでいるとのことである。音楽が子どもたちの発達に与える影響を考慮しながら、子ども自身が音楽を楽しむことをめざし、音楽と子どもたちとの出会いを創っていく仕事といえる。

ベビー賛美歌のプログラムは、母親のメンタル面を考慮した内容にもなっている。音楽療法の基礎知識を基に、音や声と人間との関係について理論的な基盤のあるプログラムが検討されていることもわかる。指導担当者はマザリーズという言葉については周知していないとのことであったが、常に歌いかけのように語りかけていた。メロディックに語りかけることにより、マザリーズの特徴が顕著に表出されていくことになる。音楽や歌うことが母親のマザリーズ表現を豊かにしていくことは実践においてもみられる（児玉, 2015）。

最後にピアノの上で乳児を寝かせたり、座らせたりしながら、ピアノ演奏と母親の歌を聴かせていた。乳児の安全面を考慮することが優先してしまう日本では、あまり見られない光景である。指導者は「響きが直接身体に伝わり、音を身体的に感じる機会となる。歌の声も、

乳幼児は身体全体の感覚で感じている。」と述べていた。さらに音楽と身体との関連を研究してきたジョン・ブラッキングは、「すべての音楽は身体の動きとして始まり、身体で音楽を感じることは、他者と共鳴できるようになることにもっとも近い」と指摘している (Blacking, 1973)。

今回のデンマークのベビー賛美歌の視察を通して、歌いかけには乳幼児の情動を安定させ、他者と共鳴していく効果があることが示唆された。さらに、共同体の声の文化という視点で考察していく。

2) 声の文化としての歌いかけ

ディサナヤケが述べているように、母子相互作用にマザリーズのような音楽的特徴があるのは、音楽と音と動きが感情を表出誘導し、母子がそれぞれ抱く感情を調和させる役割を果たしており、この調和は、母子関係を深め、最終的には子どもを文化に順応させるのに欠かせないのである (Dissanayake, 2000)。教会という組織が取り組んでいる地域子育て支援と一環という視点のみではなく、マザリーズとしての歌いかけを集団として意識的に実践することの意味を、ベビー賛美歌は示唆している。それは声の文化の継承ともいべきものといえるのではないだろうか。

声による言葉かけについて言語学者であるオングは、「言語は基本的にはどのような場合でも話し聞く言語であり、音の世界に属している (オング, 1991)」としている。人間の日常生活は「話し聞く」という声の文化から逃れられないということである。そして、言葉は声という音声を通じて存在し、すべての音は音を出すものの内部構造を経ており、中でも人間の声は人間のからだの内部から出ているがゆえに、人間の身体は声の共鳴体をなしているとする。「すべての音声、とりわけ口頭での発話は、生体の内部から発するのであるから、力動的dynamicなのである (オング, 1991)」と述べている。母親の全身体を使ったマザリーズは、乳幼児の聴覚を含む身体を共鳴させているといえるであろう。

乳幼児は、その後生きていく共同体の声として、まず母親の声を聴く。柔らかなマザリーズの声に共感し、その声の主体である母親の発する音声を志向し、模倣していく。さらに音声を言葉として理解し、言葉による他者との相互作用を通じ、共同体の一員となっていく。マザリーズは、誕生してくる乳幼児たちが共同体の一員として生きていくためのStarting Empathyとしての役割を担っているといえるであろう (児玉, 2015)。

コミュニケーション能力を高めるというテーマの下、様々な教育プログラムが導入されているが、コミュニケーションの原点は、まさにこのマザリーズで語ること、歌いかけることであるのではないだろうか。

7. おわりに

本論においては、乳幼児への歌いかけの効果をマザリーズの視点から明らかにした。マザリーズの特徴を持つ歌いかけは乳幼児にとって重要な働きかけであることがわかった。また、実際の乳幼児を対象とした歌いかけの活動を実践しているデンマークのベビー賛美歌プログラムの視察内容とインタビュー内容の考察を通して、乳幼児への歌いかけは単に子育て支援という次元として捉えるものではなく、人類の声の文化の継承として理解し、取り組んでいくべき課題

であることを確認した。

今後はマザリーズや歌いかけについて、実践的研究を通してさらなる効果について検証していくことが求められる。また、地域における声の文化としての歌いかけの実践を、次世代の母親や保育者にどう継承していくかを課題として研究していきたいと考えている。

Abstract

Motherese is also known as infant-directed speech (IDS) and is a way of talking to infants that seems to be naturally occurring. There are three main characteristics of IDS:

(1) speaking in a higher pitch than normal, (2) speaking more slowly than normal and (3) using greater intonations than normal. This is a universal phenomenon that can be observed in the interactions with infants by individuals, families or groups of people regardless of the language they speak. Songs directed at infants, such as lullabies, may be greater expressions of the characteristics of motherese. This study examined these expressions in a Danish setting for parents and infants called the

Baby's Hymn Programme (Babysalmesang). Through observations, interviews and discussions with mothers in the programme, this study confirms that this type of communication in early childhood development has a positive impact not only on the infant; however, it may be the beginning of how the oral traditions of a culture are passed on from generation to generation.

注

- (1) マザリーズの特徴として、一般的にはこの3点が挙げられるが、同じ言葉を繰り返すことも特徴として挙げている研究もある。志村洋子 (1993) 『赤ちゃんとの話し方』 ごま書房、4-6 頁。
- (2) デンマーク政府保健省
<https://www.sundhed.dk/borger/sygdomme-a-aa/boern/undersogelser/boerneundersogelser/2015年9月22日最終閲覧。>
- (3) ベビー賛美歌には、父親が参加することもある。乳幼児への歌いかけは、母親のみではなく養育者すべてが関わることであるが、一般的に母親がその役割を担うことが多いことや母子の愛着形成といった視点から、本論においては母親を取り上げている。
- (4) 生理的な反応は、唾液中のコルチゾール分泌量による評価で比較された。
- (5) 乳幼児がマザリーズの感情的要素に反応しているかを近赤外線分光法 (near-infrared spectroscopy; NIRS) を用いて、生後2日から9日の新生児を対象にマザリーズ聴取時の脳活動を測定したところ、マザリーズを聴くと乳児の脳内のヘモグロビンが増加することは明らかにされている。
Trehub, S. E. 2003 Musical predispositions in infancy: an update. In *The Cognitive Neuroscience of Music* (ed I. Peretz and R. Zatorre), p.13. Oxford: Oxford University Press.
- (6) デンマークの国教会員は、1984年に国民の91.6%、2000年は85.1%、2009年は81.5%となっている。デンマーク教会省<http://www.km.dk/> 2015年9月10日最終閲覧。
デンマークの国教会についてMinistry of Ecclesiastical Affairs
http://www.km.dk/fileadmin/share/Trossamfund/Freedom_of_religion.pdf 2015年9月10日最終閲覧。
- (7) 撮影した写真はすべて指導担当者に送付し、その後、参加者から掲載承諾を得ている。
- (8) ペダゴグ (Pædagog) の職業領域は保育園、学童保育、レクリエーションセンター・老人福祉施設・養護施設・刑務所など保育・療育全般に渡っている。社会教育士・生活指導員といった邦訳が当てられるこ

とが多い。資格取得要件は、基本的には養成機関である専門総合大学における3年半を卒業することである。音楽ベタゴは、0歳から9歳の音楽専門と保育と教育の担当者となる。

(9) インタビュー日時 2015年9月9日、11時30分～12時10分

引用・参考文献

- Blacking, J. (1973) *How Musical Is Man?*, Seattle: University of Washington Press.
- Diissanayake, E. (2000) Antecedents of the temporal arts in early mother-infant Interaction, *In the origin of music* (ed.N.L.Willin, B.Merker, and Broun) . pp.386-410, Cambridge, Ma: Massachusetts Institute of technology.
- Fernald, A. (1985) Four-month-old infants prefer to listen to motherese, *Infant Behavior and Development*, 8, 181-195.
- Fernald, A. (1992) Meaningful melodies in mothers' speech to infants, In H. Papousek, J. Urgan, & M. Papousek (Eds.) , *Nonverbal and communication: Comparative and developmental approaches*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ferguson, C. A. (1966) Assumptions about nasals; A sample study in phonological universals, In J. Greenberg (Ed.) , *Universals of Language*. 2nd ed. Cambridge: MIT Press. pp.53-60.
- Fisher, C., & Tokura, H. (1996) Prosody in speech to infants: Direct and indirect acoustic cues to syntactic structure, In J. L. Morgan & K. Demuth (Eds.) , *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates. pp.343-363.
- Fried, R. & Berkowitz, L. (1979) Music hath charms and can influence helpfulness" *Journal of Applied Social Psychology*, 9, pp.199-208.
- カイ・タニング (1987) 『北方の思想家 グルトヴィ』 渡辺光男訳 杉山書店、p101。
- Kai Thaning (1972) .N.F.S GRUNDTVIG : *The Danish Cultural Institute*, Copenhagen, Denmark, Det Danske Selskab.
- 児玉珠美 (2015) 「人類にとってのマザリーズの意味」 内山伊知郎監修『マザリーズの理論と実践』 pp.1-12頁、北大路書房
- Morgan, J. L., Meier, R. P., & Newport, E. L. (1987) Structural packaging in the input to language learning: Contributions of prosodic and morphological marking of phrases to the acquisition of language", *Cognitive Psychology*, 19, 498-550.
- Street, A., Young, S., Tafuri, and Ilari, B. (2003) Mothers' attitudes to singing to their infants", Proceeding of the 5th Triennial ESCOM conference (ed.R Kopiez, A.C.
- Lehman, I. Wolther and C. Wolf) . pp.628-31. Hanover: Hanover University of Music and Drama.
- Striano, T., Vaish, A., & Benigno, J. P. (2006) The meaning of infants' looks: Information seeking and comfort seeking?, *British Journal of Developmental Psychology*, 24, 615-630.
- Trehub, S. E. (2003) Musical predispositions in infancy: an update. *In The Cognitive Neuroscience of Music* (ed I. Peretz and R. Zatorre) , pp.3-20. Oxford: Oxford University Press.
- Trehub, S. E., and Nakata, T. (2001) Emotion and music in infancy, *Musicae Scientiae Special Issue*, 2001-02, pp.37-59.
- Trehub, S. E., Unyk, A.M., and Trainor, L. J. (1993) Adults identify infant-directed music across cultures, *Infant Behaviour and Development*, 16, 193-211.
- Werker, J. F., & McLeod, P. J. (1989) Infant preference for both male and female Infant-directed talk: A developmental study of attentional and affective responsiveness. *Canadian Journal of Psychology*, 43, 230-246.
- ウォルター・J・オング (1991) 『声の文化と文字の文化』 桜井直文他訳、藤原書店。
- Walter, J. Ong. (1982) *Orality and Literacy*. Methuen & Co.Ltd.